

九州地方における郡是製糸株式会社分工場の形成過程

山 田 智 子

郡是製糸株式会社は、大正後期から昭和初期にかけて宮崎・宇島・熊本・臼杵に大規模な工場を建設した。敷地規模の平均は1万7千坪で、原料地盤の確保、鉄道駅の開通、近世以来の町場との近接地、工業用水としての上水と排水路の確保などが立地条件となった。生産施設と居住施設を区分し、建物の桁行を東西方向に長く配置するという創業以来の配置計画は大正時代までは遵守された。しかし熊本分工場では再繰場・繰糸場をRC造にし、繰糸場を南北方向に配することにより、作業動線の効率化がはかられた。外観にも洋風意匠が多用され、戦前の近代工場の到達点に達したといえよう。

キーワード：郡是、九州、分工場、近代化、形成過程

1. はじめに

日本の近代化に貢献した産業は「官」の系譜と「民」の系譜に分けられる。製糸産業の分野では、前者の代表例として明治5（1872）年建設の福岡製糸場があり、建築史研究も進んでいる。しかし、同製糸場は技術や人材の育成が目的であったため、経営的には成り立たなかった¹⁾。経済的に成功するのは、「民」の系譜として明治後期以降に発達する、郡是・片倉などの大規模な民間製糸工場が出現してからである。しかし、発展期として重要な時期にもかかわらず、これらに関する建築史研究は、社宅や事務所建築を除き、個別に報告されることが多く²⁾、まとまったものが少ないという状況にある³⁾。

大規模な民間製糸企業は、明治後期から大正期にかけて地方の中小製糸会社を合併し、一気に全国に展開している。それらの企業の工場構内には、生産施設の他に社宅・寄宿舎・食堂・浴場・病院などの生活関連施設が設けられ、ひとつのコミュニティが形成された。さらに工場

は、養蚕農家が多数を占める原料供給地域として、工場が立地する地域社会とも密接に結びついていていた。そこで、この時期の工場の形成過程を地域とのつながりの上で捉えることは、同時代の地域の近代化過程の一端を解明することにもつながる。

同社は、大正9（1920）年の宮崎分工場設置を皮切りに、大正11（1922）年に福岡県の宇島、昭和3（1928）年に熊本、昭和7（1932）年に大分県の臼杵に分工場を設置し、九州地方に進出している。この時期は、全国展開の途上で同社が発展を遂げ、成熟する時期に当たり、戦時体制になる以前の経済的に良好な時期でもあることから、工場建築の完成形に至るまでの過程がそこに集約されているとみることができる。また、「郡是」の社名にあるように京都府何鹿郡の地域振興を目的に創立した同社にとって、郡外への進出はひとつの突破口であった。突破口はすでに明治42（1909）年の兵庫県進出によって開かれたのであるが、本社から最も遠く離れた九州への進出は、「地域主義」⁴⁾に立脚した経営理念の根幹を問うものである。つまり、工

場の形成過程とそれによる地域の近代化は、その地域の自立した経済システムとして成立せねば成功しない。その点において、九州という同社にとってまったくの更地で同社が工場をどのように展開したかを探ることは意義深い。

以上のような背景から、本研究は、近代における大規模民間製糸工場の形成過程と全国展開による地域の近代化について、郡是製糸株式会社（現ゲンゼ株式会社）を事例に、九州地方の同社分工場に焦点を当て建築史の視点から明らかにしようとするものである。

2. 九州における分工場の沿革

前述した4箇所の分工場について、それぞれの沿革⁵⁾と、2008年2月から5月にかけての現地調査で明らかになった現状を示す。

(1) 宮崎分工場

明治16（1883）年宮崎県が再置され、県政の勸業政策として蚕糸業が奨励された。宮崎分工場は、明治22（1889）年に士族の授産施設として50釜（蒸気機関6馬力）で創業した宮崎製糸伝習所が起源である。伝習所が明治45年に解散した後は宮崎製糸場として経営されていた。

大正9（1920）年3月、郡是製糸がこれを買収し、同年4月に124釜をもって事業開始した。昭和18（1943）年6月に廃止されるまで、最大設備は昭和5（1930）年の556釜であった。同年6月に工場は川崎航空機重工に売却されたが、昭和20年8月の空襲で全焼した。その後、昭和29年に宮崎市営権現団地が建ち、現在に至っている。製糸工場時代の正門が近年まで残っていた⁶⁾が、平成20年2月の調査では既に撤去されていた。

一方、昭和9（1934）年、工場北側に隣接する敷地に蚕事所宮崎支所を設置。昭和18（1943）

年に日本蚕糸製造株式会社に移管され、戦災により建物の半分以上が焼失した。戦後復帰し、元の敷地には宮崎蚕種製造所（敷地面積7,434坪、延建坪1,679坪）が建てられたが、昭和33（1958）年に合理化のため休止した。

(2) 宇島分工場

大正9（1920）年、郡是の創業精神に則り築上製糸株式会社が設立したが、わずか2年で経営困難となった。大正11（1922）年、郡是製糸が地元の要望に応じてこれを買収し、128釜で操業を開始した（敷地約1,000坪）。大正12（1923）年の二日市乾繭場設置に伴い、余剰原料消化のため一時は京豊製糸場（48釜）を賃借していた。昭和8（1933）年、全設備360釜を多条機に改め、千葉式煮繭機2基、揚返機100窓の設置に伴い、建物の増築改造を行った。昭和16（1941）年、軍需品生産など、事業内容を変更した。昭和18（1943）年、日本蚕糸製造株式会社に統合されたが、昭和21（1946）年には復帰、再び製糸業に転換した。昭和31（1956）年は工場敷地面積9,085坪、建物2,287坪であった。生産性向上に伴う繭不足と新規事業育成により、昭和33（1958）年、工場の合理化のため休止した。

(3) 熊本分工場

大正11（1922）年、上熊本に乾燥場が設置された（当時梁瀬分工場所属）。昭和2（1927）年4月、乾燥場の敷地を拡張して熊本分工場を新設し、翌3（1928）年248釜で操業を開始した。その後、最高557釜に達したが、昭和17（1942）年に廃止された。

(4) 臼杵分工場

大正7（1918）年、臼杵町長が郡是の創業精神や経営方針が地方蚕業の発達を促したことを知り、工場誘致運動を始めた。大正9（1920）年に工場設置の前提として臼杵乾燥場（本工場所属）を設立。大正15（1926）年、臼杵町有志

で共栄蚕業振興会を組織し、郡是の主義精神の普及・徹底を図り、優良繭の産出に努めた。昭和5（1930）年、土地17,000坪を購入して拡張。昭和7（1932）年に臼杵分工場として256釜で操業を開始した。昭和9（1934）年から12年にかけて多条機に転換し、312釜となった。戦前は従業員数568名、購繭数量239,785貫、生糸生産高28,756貫が最大。昭和18（1943）年に日本糸製造株式会社に吸収されたが、昭和20（1945）年に復帰した。昭和31（1956）年の工場は敷地面積15,417坪、建物3,536坪である。昭和36（1961）年、原料繭の確保のため、鐘淵蚕糸と福知山・鳥取・鳥根の原料地盤と交換し、休止した。

3. 九州における分工場の配置計画と建築構成

同社は明治末期にいちやく分工場の大規模化を視野に置いていた。これまでの調査により、明治期の買収工場の敷地規模は7分工場で平均2,623坪であったが、大正期になると13分工場の当初平均敷地規模は9,969坪、昭和期には8分工場で平均13,948坪となっていることが明らかにされている⁷⁾。大正4年に買収した津山分工場の敷地は、当初旧城下町の元武家地1,557坪の規模しかなかったが、買収後すぐに隣町の土地14,937坪を購入し、移転した。したがって、買収工場であっても新設と変わりなく、大型工場の計画的な建設が進められている。

大正後期から昭和期には九州や中国地方を中心に分工場が展開され、熊本や臼杵などは、乾燥場を先に建設して原料を十分に確保してから大型の工場を建設するという手法がとられた。良質で大量の原料繭を確保するため、工場進出以前から養蚕の技術講習会を行い、指導奨励によって繭の生産力を高め、地域の養蚕農家の発

展に貢献している。そこで、この時期の大型化した九州の分工場について、配置計画と建築構成の特徴や形成過程を調べ、同社がめざした近代工場の形を探ってみる。方法は、昭和6年度末における各分工場の配置図とそれに対応する「土地・建物調査表」の分析、それに加えて現地調査により立地条件の分析を行うこととした。結果を表1にまとめ、考察する。

（1）立地

まず、熊本・臼杵は近世に城下町として栄えているため、労働力としての一定の人口の確保が見込まれる。さらに熊本分工場は民家が密集した城下町区域内ではなく、境界に近接した域外に位置していたため、宅地が多くても大規模な土地を獲得することに成功している。臼杵分工場の敷地の南側は明治21年から大正2年にかけて埋め立てられた土地である⁸⁾。この土地を加えなければ、当初乾燥場を置いた敷地を大型工場用地として拡張することは不可能であったとみられる。

宮崎・宇島は在郷町であり、街道や海運が発達していた。物資の搬入・搬出経路が確保されているため工場立地としての要件は整っていたといえる。同様に、各工場はすでに鉄道が開通していた地域にあり、しかも主要駅に近いところが選択され、建設されている。いずれにせよ、明治期に同社が分工場を設置していた山間部の農村地帯はまったく選択されなかった。

（2）土地の規模

最も規模の小さな宇島分工場でも敷地は1万3千坪を超える。4分工場の平均は17,391.78坪であり、九州地方の分工場の大規模化は定着している。2万坪を超える宮崎分工場では、工場のほかに蚕事所を設け、九州地方の蚕糸業の中心地を形成しようとしていたことがみてとれる。

表1 分工場比較表

分工場名	宮崎	宇島	熊本	臼杵	本工場(参考)
乾燥場操業年	大正9年(1920)	大正11年(1922)	大正11年(1922)	大正9年(1920)	明治29年(1896)
工場操業年	大正9年(1920)	大正11年(1922)	昭和3年(1928)	昭和7年(1932)	明治29年(1896)
買収・新設	買収(宮崎製糸場)	買収(築上製糸株式会社) 買収以前の当初から監修	新設	新設	新設
場所(当時の住所)	宮崎市権現町	福岡県築上郡三毛門村	熊本市池田町	大分県北部郡臼杵町	京都府何鹿郡綾部町
近世町区分	在郷町	在郷町(港町)	城下町	城下町	
土地規模(坪)	20,162.88	13,151.34	18,867.90	17,385.00	
昭和6(1931)年度末土地目					本工場機能以外の本社・誠修学院・蚕事所と合わせた土地になっているので比較対象にはならない。よってここには記載しない。 大正6年に本社と分離。
昭和6(1931)年度末工場敷地の特徴	工場敷地の北側(乾燥場の北側)に広い敷地を確保している。	岩岳川沿いにあり、北は日豊線と接する。土地の造成にあたって、敷地内の耕作道を廃し、川沿いに新たに道路を開設。工業用水として2箇所を鑿泉。	敷地東側は菊池線の移設に伴い、旧軌道を敷地・水路としている。水路は敷地半分を囲む。西側は主要道に面す。工業用水として2箇所を鑿泉。社宅用地を含めた排水工事を行う。	臼杵湾に面する。新開地は埋立地。北津留村に工場の水源地となる土地を確保している。	
付近の駅・鉄道開通年	宮崎軽便鉄道宮崎駅 大正2年(1913) 日豊線全線開通宮崎駅 大正12年(1923)	日豊線宇島駅 明治30年(1897) 宇島鉄道宇島駅 大正3年(1914)	日豊線上熊本駅 明治24年(1891) 菊池軌道上熊本駅 明治44年(1911)	日豊線臼杵駅 大正4年(1915)	山陰線綾部駅 明治37年(1904)
建築面積(坪)	5,046.95	3,568.33	5,505.63	464.25	6,805.25
昭和6年度末釜数	556(S5年頃)	408	477(S10年頃)	-	556
昭和6(1931)年度末建物構造別					
昭和6(1931)年度末建物階数別					
昭和6(1931)年度末建物屋根葺材別					

分工場名	宮崎	宇島	熊本	臼杵	本工場(参考)
昭和6（1931）年度末 建物の特徴	昭和7年4月末日竣工 予定の新築工事中の 第一・第二繰糸場と も木造スレート葺平 屋の在来型となっ ている。木造率が高く、 SRC造は食堂関連 施設のみ。	SRC造は再繰場と 防火壁と水槽に採用。 S造は乾燥場に採用。 繰糸場はすべて木造 で従来の機械を使用。	RC造は繰糸場・再 繰場・機関場・文書 庫・女子寮関連施設 の防火壁に採用。特 に繰糸場は南北に長 く、木造の定型を脱 却。繰糸機械は6～ 7口。木造繰糸場は 養成工場や試験工場。	昭和6年度末には工場 の建設が終わってい ないため、上記は従 来から建てられてい た乾燥場関連施設の 割合を示す。木造瓦 葺が多い。	SRC造は大正14年の 再繰場に、RC造は 昭和5年の繰糸場と防 火壁に採用。再繰場 と繰糸場とも大型で 小屋組は鉄骨鋸屋根。 3階建は乾燥場。
廃止年	昭和18年(1943)廃止	昭和33年(1958)休止	昭和17年(1942)廃止	昭和36年(1961)休止	
その後の状況	昭和18年川崎航空機 重工に売却されたが、 空襲で全焼。昭和29 年に宮崎市営権現団 地が建ち、現在に至 る。製糸工場時代の 正門が近年まで残っ ていたが、平成20年 の調査では既に撤去 されていた。	工場の建物の一部を 払い下げ、昭和29年 に商店街(新天街)、 若宮神社跡地の商店 街を建設・分譲。 昭和36年、大分製紙 株式会社豊前工場と して操業開始。既設 製糸工場の施設が生 かされている。	平成20年の調査では 工場跡地に県立総合 体育館と集合住宅が 建てられている。工 場敷地を囲んでいた 水系などは残ってい る。	休止後は鐘紡と原料 地盤を交換。 平成20年の調査では 工場跡地は市民グラ ウンドと宅地になっ ている。甲号社宅な どが残存し、今も個 人宅として使用され ている。	現在もナイロン製靴 下の製造工場として 稼働中。

(3) 工業用水（上下水道）

製糸工場では、大量の水が必要で、しかも水の清潔さが要求される。各工場は井戸を複数個所掘削し、工業用水として利用している。臼杵分工場では井戸水の水質がよくない⁹⁾という要因からだと思われるが、水源地として離れた土地を確保している。さらに「郡是製糸工場ノ建設」などによる町の発展により、昭和9年に上下水道敷設の申請書が町長から内務大臣宛に提出されている¹⁰⁾。

また排水路の確保も重要である。熊本分工場では敷地を水路で取り囲み、工場の中央廊下の下部にコンクリート造の排水路を設けている。通常、排水は水槽下水溜でゆっくりと浄化され、排出される。工場敷地内や周辺には河川や小さな用水路が流れている。

(4) 配置計画

4分工場の昭和6年度末付の配置図（図1、図2、図3、図4）をもとに、すでに本社本工場などについて明らかになっている工場の発展過程¹¹⁾と比較しながら考察する。

大正9年操業の宮崎分工場は、主要な敷地が

東西に横長で道路に囲われている。道路を隔てた北側敷地に乾燥場と繭買入場を設け、東側敷地を社宅街とする。主要敷地の東西長さを生かし、女子寮舎と生産施設を横に並べ水路で区切っている。各ゾーンの中央廊下をつなぐ接点となる廊下側に食堂を設置している。これは創業時の工場配置のプランと基本的には同類で、各ゾーンの増築を意識したプランでもある。梁行が短く東西方向に長い桁行をもつ繰糸場や女子寮舎は明治時代のスタイルと変わっていない。

大正11年操業の宇島分工場の配置計画も宮崎分工場とほぼ同じである。ただし、敷地内に乾燥場を設置している点が違っている。

昭和3年操業の熊本分工場の配置計画はこれまでの定型とはやや異なる。南北に長い敷地の南側を女子寮舎ゾーンとし、食堂をはさんで北側を再繰場と繰糸場、さらに北側に乾燥場や繭扱場を設置する。この繰糸場が南北に長い建物になっている点がこれまでの工場と大きく異なる点である。これにより女子寮舎から繰糸場まで2本の廊下を通せるので作業動線の効率化につながっている。



図1 宮崎分工場配置図

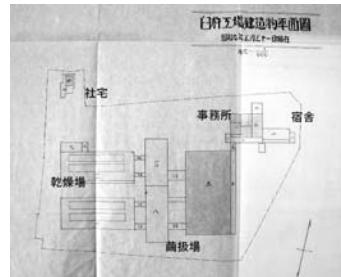


図2 白杵分工場（旧乾燥場のみ）配置図



図3 熊本分工場配置図

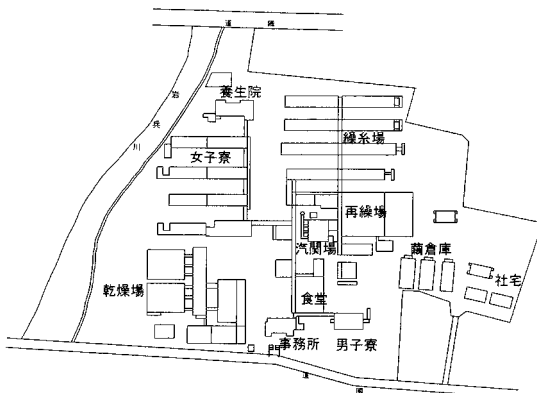


図4 宇島分工場配置図（原図をトレース）

昭和7年操業の臼杵分工場は、敷地は広大であるが、6年度末は建設中で、以前からあった乾燥場の施設だけが置かれている。乾燥場部分は他の生産施設とは独立した存在であることがわかる。

(5) 建築構成

宮崎分工場と熊本分工場は、建築面積が本工場より少し小さいだけなので、当時の工場としてはかなり大規模な工場であったといえる。建物階数別に4分工場を比較しても平屋と2階建ての割合はほぼ同じなので、同じような用途の建物で構成されていたことが伺える。

また、明治29年から撤去・増築・移築を繰り返してきた本工場の構造別と屋根葺材別の割合について、4分工場と比較すると、熊本分工場が他と異なる建築構成であることは明確にみてとれる。宮崎分工場は食堂だけがSRC造、宇島分工場は再繰場だけがSRC造で、全体としては木造率が非常に高い。一方、熊本分工場は、床面積の大きい再繰場と繰糸場をRC造にし、工場の中央部にそれ自体が防火壁となるように建てられている。前述のように南北に長い繰糸場にすることができたのも鋸屋根にするなどのくふうがあったと推測される。繰糸機はまだ6口～7口のものにすぎないが、今後の大型多条機の登場を予見し、それに対応した建物であったといえる。さらに屋根葺材は瓦の割合が少なく、瓦葺のほとんどが塗屋造りの繭倉庫に使用されている。おそらく多数を占める工場施設群は洋風の意匠で統一されていたのであろう。昭和4年の世界恐慌に陥る前の熊本分工場の建築は、戦前にたどりついた製糸工場の完成形のひとつだといえるだろう。

4. 地域の近代化と地域振興

地域の近代化と地域振興については企業誘致に熱心だった臼杵町からみてみたい。「臼杵の蚕業発達に画期をなしたのは郡是製糸の進出であった」¹²⁾という。町は、誘致にあたり工場用水の確保として、州崎・青須賀・江無田の三箇所九個の井戸を確保して誘水し、水路設計は別府市に依頼した。土地買収費その他誘致に要した費用の不足分は41名の町有志でまかなったといわれる。

同工場は大正9年に県内の繭買入れのために設置された乾燥場を、「一郡一工場」の社是によって改組し、独立工場への転換をはかるものであった。工場完成の暁には原料不足を来すことを予測し、町として蚕繭の増収を図ることを急務としていた¹³⁾。500人を超える雇用の見込みより、養蚕農家の発展に期待する声のほうが高かったようである。恐慌のさ中に竣工した工場の大煙突は、町勢振興を願う町民の渴望をかなえ、臼杵のシンボルともなった¹⁴⁾。図5は昭和初期発行の「鳥瞰 臼杵市街図絵」であるが、図の中央に同工場が煙突とともに描かれていることから、当時の住民の期待の高さが知れる。なお、前述したが、昭和9年に申請した町の上水道工事敷設は同工場への送水がひとつのきっかけとなっており、地域の近代化はインフラ整備の上でも結びついている。

次に企業誘致に熱心であった宇島をあげる。前身の築上製糸株式会社の創設のきっかけは、郡是本社のある綾部市出身の荒川郡養蚕技師の先導であった¹⁵⁾。工場敷地の選定も同技師の専門的見解によっている。郡是精神に則り、郡内養蚕家を基盤として地方蚕糸業開発のために設立されたのである。工場の創設以来、経営を郡



図5『鳥瞰 臼杵市街図絵』の抜粋
全体図の中央に郡是臼杵分工場が大きく描かれている。

是本社に仰ぎ、郡役所より転出した職員を郡是本社に派遣し、研修を受けさせている。大正11年に郡是が買収した後は工場の拡張を図り、昭和8年には購繭数量が最高数に達し、地元の蚕業の発達に貢献した。戦後、商工会議所のはからいで工場の建物の一部を払い下げ、昭和29年に市中心部に商店街（新天街）が建設・分譲された¹⁶⁾。同時に若宮神社跡地にも工場の建物の一部を払い下げて商店街が建設・分譲されている。

昭和36年、同工場は大分製紙株式会社豊前工場として操業を開始した。現在も製糸工場時代の施設が残り、用途は違っていても、今も現役として大切に使用されている。

5. ま と め

大正後期から昭和初期に九州に建設された4分工場は、それぞれが大規模製糸工場としての近代化過程の一段階を表現している。配置計画の標準プラン（生産施設と居住施設の分離、南向き配置、構内に社宅街の確保など）に従いながらも、敷地形状に対応して床面積の大きい再繰場や繰糸場をRC造に変更してきた。その設計は大正6年に社内に置いた建設課が行うことで、迅速に分工場の建設を進めることを可能にした。標準プランを確立することで、同種の建物が同時に多数の分工場に採用され合理化されたのである。このような結果は、機械化・分業化による効率化と社員教育による組織化の推進に因るものであり、「民」の系譜の工場が近代化された大型工場として経済的成功をおさめる要因にもなったことに違いない。

また、研究を進めていく上で、分工場が県内養蚕農家の生産する原料繭の確保に努めていたことを確信した。たとえ本社が綾部にあると、地元の原料を使い、地元の職工が生産する工程は「地域主義」の根幹を覆すものではなく、「郡是精神」は全国展開した大型工場と地域の有機的な結びつきの中に潜んでいた。工場の建物が払い下げられて地元の商店街の建物に再生されたという小さなエピソードがそれを物語っている。

謝辞 本研究を進めるにあたり、グンゼ株式会社人財開発室の大井重夫氏、グンゼエンジニアリング株式会社の大槻克之マネージャーと西村光代氏、大分製紙株式会社豊前工場の田北信行工場長と藤田寛氏には多大なご協力をいただいた。ここに記して謝意を申し上げる。

本稿は、日本学術振興会科学研究費基盤研究C「郡是製糸株式会社における分工場の形成とそれによる地域の近代化に関する建築史研究」の成果の一部である。

註

- 1) 村松貞次郎「富岡製糸所」『日本科学技術史体系 第17巻 建築技術』日本科学史学会1964、『富岡製糸場調査報告書』富岡市教育委員会2006
- 2) 例えば『旧帝国製糸八尾工場の明治建築』八尾市教育委員会1987のほか、多くは近代化遺産総合調査報告書などで報告されている。
- 3) この時期の上州の小規模な組合製糸に関しては松浦利隆『在来技術改良の支えた近代化』岩田書院、2006の研究がある。また、2006年『富岡製糸場調査報告書』富岡市教育委員会が刊行され、富岡製糸場については、建設当初のみならず、これまで未発表の昭和62年までの民間の三井・原・片倉時代のものまで詳細を知ることができるようになった。
- 4) 祖田修「波多野鶴吉の地域計画―郡是製糸成立の歴史的意義」龍谷大学社会科学部研究年報第7号、1976の中で、「地域主義」と呼ぶ理由を「“何鹿郡を単位とする農業と工業の有機的結合による地域生産共同体の計画的形成”という視点を重視している」ことによる。
- 5) 各分工場の沿革については以下の資料を参考にした。
『郡是四十年小史』郡是製糸株式会社、1936
『郡是製糸株式会社六十年史』郡是製糸株式会社、1960
『ゲンゼ株式会社八十年史』ゲンゼ株式会社、1978
『ゲンゼ100年史』ゲンゼ株式会社、1998
『ありがとう九州の日本国有鉄道』クオリティ 21、1987
『宮崎県政八十年史 上巻』宮崎県、1967
『宮崎県史 通史編 近・現代2』宮崎県、2000
『宮崎市史 第三巻』『同 第四巻』宮崎市史編纂委員会、1959
『宮崎市史 続編（上）』宮崎市、1978
『宮崎県工業発達史』宮崎県工業試験場編、1954

- 『宮崎市の回顧と展望』宮崎市史編纂委員会編、1954
田代学『地図からみた宮崎市街成立史』江跡庵、1996
田代学『地名にみる原風景 宮崎市街字町名誌』江南書房、1998
『みやざき水物語 宮崎市水道史』宮崎市水道局、1988
『福岡県史 通史編 近代 産業経済（二）』福岡県、2000
『豊前市制50周年記念写真集 ぶぜん』豊前市、2006
『熊本市史』熊本市、1932
『新熊本市史 通史編 第六巻』熊本市、2001
『同 第七巻』熊本市、2003
『同 第八巻』熊本市、1997
『熊本市制100周年記念 図説熊本・わが街』熊本日日新聞社、1988
『熊本市誌』熊本市役所、1917
『飽託郡誌』飽託郡、1906
米村武夫『熊本県蚕糸業史』熊本県蚕糸振興協会、1955
『大分県史 近代編Ⅰ』大分県、1984
『同 近代編Ⅱ』大分県、1986
『同 近代編Ⅲ』大分県、1987
『大分県蚕糸業史』大分県養蚕販売農業組合連合会、1968
『白杵市史（中）』白杵市、1991
『同（下）』白杵市、1992
『うすきの歴史的環境と町づくり―白杵―観光計画』日本ナショナルトラスト（財）観光資源保護財団、1986
『白杵町勢一覧』白杵町役場、1921
- 6) 河野敏郎・田代学『江平町郷土誌』（株）まちづくり計画・建築研究所、2004のp.241の8～9行目
 - 7) 山田智子・大場修「平成19年度研究実績の概要」として日本学術振興会に報告されている。
 - 8) 『うすきの歴史的環境と町づくり―白杵―観光計画』日本ナショナルトラスト（財）観光資源保護財団、1986のp.56の図に記載されている。

- 9) 『臼杵町上水道誌』 臼杵町役場、1941のp.101の1行目「當町ハ全般二重リ水質良好ナラザル」とある。
- 10) 前掲9) のp.99～101
- 11) 山田智子・大場修「旧郡是製糸株式会社本社工場の発展過程 ―近代製糸産業の形成過程に関する建築史研究その1―」日本建築学会近畿支部研究報告集2000や山田智子・大場修「旧郡是製糸株式会社における分工場の配置計画と社宅について ―同その5―」日本建築学会大会学術講演梗概集2004がある。
- 12) 『臼杵市史 (中)』 臼杵市、1991のp.152の11～12行目
- 13) 12) 前掲p.201の8～10行目
- 14) 12) 前掲p.153の8～9行目
- 15) 広瀬梅次郎『豊前市産業百年史』1966に築上製糸株式会社、郡是製糸株式会社宇島工場、大分製紙株式会社豊前工場の一連の沿革が詳細に記載されている。
- 16) 『豊前市史下巻』 豊前市、1991のp.569の8～13行目。最近では『豊前市TMO町歩きマップvol.6』 豊前商工会議所、2008に写真とともに記事がある。